

『二つの道 エレミヤの道』(エレミヤ 21:1～10・詩篇 23:4)

【開会聖句】

詩篇

23:4 たとえ 死の陰の谷を歩むとしても 私はわざわいを恐れません。あなたが ともに
おられますから。あなたのむちとあなたの杖 それが私の慰めです。

<序論>

・「エレミヤ」21～24章は、最初と最後の部分がユダ最後の王となったゼデキヤの暗い運命についての予告を記した散文調の記事で占められています。その一つ前の20章との間には10年ほどの時間的な隔りがあるのですが、21章で場面はいきなりバビロンの王ネブカデネツアルの軍隊に包囲されているゼデキヤ治下のエルサレムに移ります。エレミヤは、それまでのエホヤキムの時代にエルサレムに下される神の裁きを語りました。しかし、20章のエレミヤの嘆きのことばからうかがい知れるように、その預言が聞かれることはなかったのです。ところが、それから10年が経ち、状況は一変します。今朝の場面が第二回目のバビロン捕囚、紀元前589～586年のエルサレム包囲戦のうち、いつ頃のことであるのかは分かりません。ただ、それまでエホヤキムと同じようにエレミヤに聞くことを拒み続けたゼデキヤも、いよいよ追い詰められた時、もはや、なりふり構わず、助けを求めてくるのです。

<本論>

1. どうか、私たちのために主にお尋ねください

1節には、ゼデキヤ王がエレミヤの下に遣わした二人の使者の名前が記されています。一人はマルキヤの子パシュフル、そしてもう一人は祭司ゼパニヤ。このパシュフルについては、同じ名前の人物が一つ前の20章でエレミヤを迫害した祭司として出てきます。一瞬、同じ人物かと思ってしまうのですが、今朝のパシュフルは、少し後の38章4節によれば、ゼデキヤ王の宮廷の高官（首長たち）の一人で祭司ではありません。ですから両者は別人ですが、ゼデキヤ王は彼の高官と主だった祭司を選んで、エレミヤの下へと遣わしたのです。そして、王が期待したエレミヤからの答えは、2節にある「主がかつて、あらゆる奇しいみわざを行われたように、私たちにも行い、彼を（つまりネブカデネツアルを）、私たちのところから引き揚げさせてくださるかもしれません」ということでした。それは、前にもお話ししたように、かつて、アッシリアの王センナケリブがエルサレムを攻め、包囲した時、ヒゼキヤ王が預言者イザヤに求めて奇跡的な勝利を収めたような奇跡の再現を期待していたということです(Ⅱ列王 19:2 以下)。

しかし、この時、エレミヤから返ってきた答えは、イザヤとは全く違ったもの、驚くべきものでした。

2. わたし自身があなたがたと戦う

それは、4～7節にあった通りなのですが、主は「お前のそのような願いはかなえられない」と言われただけでなく、「わたし自身が、伸ばされた手と力強い腕をもって、怒り、憤り、大いなる激怒をもって、あなたがたと戦う」（エレ 21:5）と告げられたのです。そして、その最終的な答えが、6節と7節。

『この都に住むものは、人も家畜もわたしは打つ。彼らは激しい疫病で死ぬ。その後で一主のことば—わたしはユダの王ゼデキヤとその家来、また、その民と、この都で疫病や剣や飢饉から逃れて生き残った者たちを、バビロンの王ネブカドネツアルの手、敵の手、いのちを狙う者たちの手に渡す。彼は彼らを剣の刃で討ち、彼らを惜しまず、容赦せず、あわれみをかけない。』(同 21:6～7)。

ここで私たちが覚えなければならないことは、この裁きを下されるのは、あくまでも神であり、バビロンの王ネブカドネツアルではないということです。それは言い換えれば、時の世界の支配者であったバビロンの王でさえ、神の御前では、その手の中の道具に過ぎないということです。私たちはよく、この世の権力者の権勢に圧倒され、歴史を動かしているのはそのような人たちで、私たちは虫けらのように彼らに翻弄されながら生きていくしかないのかと思ってしまうがちですが、そうではなく、この歴史を支配し、ご自身の御心のままに動かしておられるのは神なのです。だからイエス様は次のように教えてくださったのです。

『からだを殺しても、たましいを殺せない者たちを恐れてはいけません。むしろ、たましいもからだもゲヘナで滅ぼすことができる方を恐れなさい』(マタイ 10:28)。

3. いのちの道と死の道

そして、8節と9節。

『「あなたは、この民に言え。『主はこう言われる。見よ、わたしはあなたがたの前に、いのちの道と死の道を置く。この都にとどまる者は、剣と飢饉と疫病によって死ぬ。出て行ってあなたがたを囲んでいるカルデヤ人に降伏する者は生き、自分のいのちを戦勝品として得る』(エレ 21:8～9)。

今までも、例えば4章の27節や5章の10節などで、神はエレミヤを通して「ただし、わたしは滅ぼし尽くしはしない」とか、「根絶やしにしてはならない」と、ユダの国が滅びても、やがて神を恐れる「残りの者」が起こされ、捕囚後に国が再建されるという希望を暗に示しておりましたが、バビロンの脅威が目前に迫り、国の命運が尽きようとする今、この時に、そのことがはっきりと示されるのです。いのちの道と死の道。それは、ゼデキヤと彼の高官たちが期待していたのとはまるで正反対の道でした。バビロンに降伏し、捕囚となる者は生き、この都にとどまり、最後まで抵抗する者は死ぬという。それは本当に、自分たちこそ選ばれた民族、神の民だと信じる

ユダの人々にとっては、驚天動地、この天地がひっくり返るようなみことばであったと思います。しかし、それこそが神のみこころ、ご計画であったわけです。今、私たちは 2500 年以上後の時代に歴史を振り返っているわけですが、その後のイスラエル、ユダヤ民族の歴史を見た時に、確かに、このバビロン捕囚という出来事は、破壊と再生と言うか、敗れて目覚めると言うか、神の民としてのいのちが新しく生まれ変わるために、なくてはならない出来事であったということを思わされます。そして、どうしても私は、今が 8 月ということもあって、かつて私たちの国の歴史にも同じようなことがあったなあ、と思わずにはられないのです。

<結論>

ただ、ゼデキヤ王にそんな二つの道を示したエレミヤでしたが、彼自身は、この後、どのような道を歩んだのでしょうか？そのことについて最後にお話ししたいと思うのですが、エレミヤは、この時、自ら預言したいのちの道を歩むことはなかったのです。彼が選んだのは死の道、つまりエルサレムにとどまることだったのです。エルサレムが陥落した時、彼は牢獄に繋がれていましたが、バビロン王ネブカドネツアルの好意によって釈放されます。もし、バビロンに行っていたら、恵まれた暮らしが約束されていたでしょう。しかし、彼はその道を選ばず、新しく総督となったゲダルヤに仕えます。しばらくして、そのゲダルヤは抵抗勢力によって暗殺されてしまうのですが、それでもエレミヤはエルサレムにとどまり続け、最後には、エジプトへ亡命する人々によって強制的にエジプトにまで連れて行かれ、そこでもしばらくの間、預言者として働いた後、その地で生涯を閉じるのです。そんなエレミヤの生き様が多くの人々に感銘を与えてきたのだと思いますが、そのお一人で、「エレミヤの生涯」という本を著した磯部隆という方がおられます。神学者ではなく、名古屋大学法学部教授だそうです。その本の中で、弟子のバルクがエレミヤの生き様を見て、余りにも不器用と言うか、損な生き方を貫く姿にあきれかえる場面があるのですが、そんなバルクにエレミヤは次のように言い放つんです。

「たとえ民が神を見捨てても、神は民を見捨てない。見捨てられたところにこそ神はおられる。」 「エレミヤの生涯」 一麦出版社 磯部隆

このエレミヤのことばは、もちろん磯部さんの創作なのですが、何かエレミヤの預言者としての矜持を見るような思いがしました。

最後に、今朝の開会聖句を読ませていただき、メッセージを閉じたいと思います。

『たとえ 死の陰の谷を歩むとしても 私はわざわいを恐れませんが あなたが ともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖 それが私の慰めです』(詩 23:4)。